－金沢大学サテライト・プラザ　ミニ講演－

日　時　３月 17 日（土）午後２時～３時

会　場　石川県立社会教育センター２階 21 号室

テーマ　「方言の現在―石川県内の事例を中心に―」

講　師　加藤　和夫　（金沢大学教育学部助教授）

はじめに

（加藤）　只今，ご紹介いただきました教育学部の加藤でございます。今日，チラシを見ておいでいただいた方にはチラシにも書いたのですけれども，今日は金沢の方言，石川の方言がどういう性格を持っているかという話ではなく，最近非常に方言が，皆さんもお気付き，あるいはお感じの点が多いと思うのですけれども，ずいぶん昔に比べるといろいろなところに出てくるようになりました。今まで日陰者だったのがいろいろな形で表舞台に出てきているということをお感じの方もいらっしゃると思います。それを最近よく，方言が見直されているとか，方言が権利を回復して方言が復権しているとか，あるいは方言が元気だとか，いろいろな言い方をしていますけれども，このことは確かに間違いないことだと思います。

今日はそういうことで，私は日頃専門的な立場から方言研究をしているわけですけれども，そういう専門の立場で，今このような方言がいろいろな形で見直されている状況というものの背景にあるものは何なのだろうかということ，それを特に石川県内，あるいは金沢あたりの事例を中心にご紹介をします。そして，ご一緒に考えてみたい。併せて，これから方言というものをどうしていくべきなのだろう，あるいはどうなっていくのだろうかということを少し考えてみたいと思っています。

私が，「方言を研究しています」と申し上げますと，人によっては「何と物好きな」という目でご覧になる方もいらっしゃるわけです。方言を扱うことが非常に何か特殊なこととか，物好きがやっていると思われた時代はもうはるかに前のことで，今，方言を研究している私どもの世代とか，あるいはもっと若い世代の人たちは，方言をやっているという意識よりも現代日本語の中の一部としての方言を研究しているのだと，そういう気持ちでやっている人が多いと思います。そういう意味では，方言が決して特殊なものではないということ，そのあたりも今日いろいろお話を聞いていただく中で，少し感じていただければと思っています。

時間が１時間ということになっておりますのであまり細かいお話はできないかもしれませんけれども，発表資料の１枚目，２枚目あたりで今日の大体のお話の構成を見ていただけたらと思っています。

１番最初のことは簡単に済ませますけれども，２番目のところで最近の石川県内を中心とした

方言に見られるいろいろな事例を，今日お配りした資料あるいはＯＨＰなどで見ていただいて，皆さんに確認していただく。新聞とか身近なところにあるような事例ばかりなのですけれども，やはりアンテナを張っていないと意外に気づかないものでして，こういうものもあったのかとお思いになる場合もあるかと思いますので，そのあたりを見ていただきながら，それと２番のことと３番がどうかかわっているのか，つまり，方言をめぐるいろいろな状況がある中でこういった具体的な事例がなぜ出てくるのかというところをつなぎ合わせて考えてみたいと思っております。

後半の方では少し北陸のご出身の方には耳が痛いというか，私自身も福井出身なので同じなのですけれども，方言に対する意識という面での全国比較をたまたま全国の研究者仲間としたことがありまして，その中で，実は北陸という地域が方言に対する意識に関しては非常に低い地域だということがわかりました。これは，ＮＨＫなどの世論調査でも従来一部指摘されてきたことではありますけれども，そういうことに少し触れてみます。

最後のところでは，あまり言葉に関する具体的事例がないのも申し訳ないと思いまして，こういうふうに方言をめぐる状況が変わりつつある中で，金沢の方言を中心に具体的にどんな変化が起っているのだろうか，その変化というのは，どういうことが原因で起っているのだろうかということを，去年から北國新聞を賑わせております「校下」という言葉（教育関係の先生方はちょっと意識なさっている言葉かと思うのですけれども）をキーワードに考えてみたい。それから，先程司会の方の言葉にも出ましたけれども，「まっし」という言葉，これはもう金沢方言の代名詞みたいにあちこちで使われているわけですが，この「まっし」も今大きく変化をしようとしております。このあたり，なぜ「まっし」なのかということを具体的にお話をしてみたいと思っています。

それから，もし時間がありましたら最後の２つなのですけれども，今の金沢の若い人たちはどういう方言を使っているのか，伝統的な金沢方言というのは今どう変わろうとしているのか，21世紀を担う若い人たちがどういう方言をこれから使っていくのだろうかというあたりを，具体例を見ながら考えてみようかなと思っています。大体そういう筋立てでお話をしてみたいと思います。

講演ですとつい話しっぱなしということが多いのですが，今日は後半，時間に少しゆとりがありますので，３時過ぎで話が終わりましたら，どうぞ日頃お考えのこととか疑問のこと，方言に関して何かお尋ねになりたいこと，その他いろいろおありかと思いますので，どうぞご遠慮なくご質問などしていただければ，どれぐらいお答えできるかわかりませんけれどもできるだけお答えをしたいと思っております。

１．見直される方言

最初に，方言をめぐっての歴史的な経緯をごく簡単にまとめました。これは確認程度で済ませたいと思います。

我が国で方言というものがいろいろな形で，先程も「日陰者」という言葉を使いましたけれども，日陰者どころか，明治から大正，昭和の戦前の学校教育においては，要するに殴り殺す，撲滅の対象であったり，あるいは発音が歪んでいる，言葉がおかしいから矯正する（最近矯正歯科が流行りですけれども），この矯正をするべき対象なのだというスローガンが掲げられて，全国で方言というものが標準語に対して劣っているから使わないようにというかたちでどんどん追いや

られていったという歴史があるわけです。

方言は戦後，ようやく少しずつその地位を回復してきたとは言いましても，大きくとらえると戦後の高度経済成長期が一つのピークを迎える 1960 年代あたりまでは，結局，方言というものは悪い言葉で汚い言葉だという戦前の価値観の継続の時期でした。東京オリンピックに象徴されるような東京一極集中，つまり東京がすべて，東京がいいのだということになりますと，東京の言葉がいいのだということになるわけで，結局，日本全国の人たちが東京の言葉をまねようとしていた時代があったという言い方もできるのではないかと思います。要するに戦前の方言撲滅期の延長線上にあった時期だと考えることができるでしょう。共通語はすべて万能であるというとらえ方がされた時代なのかもしれないと思うわけです。

それが高度経済成長期が過ぎて，日本が安定期に入る中で方言が少しずつ見直され始める。つまり，東京一極集中でいいのかという形で，「地方の時代」とか「地方の見直し」とか（地方という言葉より地域の方がいいのだという話もありますけれども），そういう「地域の再発見期」ということができると思います。そういう中で，その地方，地域といえば当然，そこでついてくるのが方言でして，それが方言の再発見期という形でつながっていったと見ることができるだろうと思います。そういう意味では，社会の，竹下元首相の「一億創生」に代表されるような世の中の動きと軌を一にしているのではないかと思います。

それが 21 世紀を目前にした 1990 年代以降になりますと，それまでにも多くの人たちがテレビなどの普及で共通語が浸透して方言が消えていくということを感じてはいましたけれども，まだ危機感までには行っていなかったのです。それが，環境破壊が危機感を呼ぶのと一緒で，いよいよ方言が危ないのではないかという気持ちになってきたのがいよいよ世紀末の 1990 年代ということなのではないかと思います。21 世紀を目前にして，このままでいいのかということを伝統的な方言を受け継いできた年配の人たちが感じ，それからまた，若い人たちの中でも本当にそういうことで消えていっていいのだろうかということを感じ始めた。こういう時代を迎えるに至って，いよいよ方言というものの存在がクローズアップされ，これからは方言と共通語が共生する時代が理想なのだという考え方が少しずつ出始めた時期がこの世紀末の 10 年ぐらいだったのではないかと思います。今は，その延長線上にきていると，大きくはとらえることができるのではないかと思うわけです。

２．最近の方言をめぐる様々な事例から―石川県内を中心に―

では，こういう全国レベルの動きに対して，石川県内ではどういうことがあるのだろうかということを見てみたいと思います。

私がちょうど金沢大学に参りまして 10 年ほどたち，こちらに来てから石川県の方言の研究を中心にずっとやっておりますが，いろいろなことを経験してまいりました。以下にいくつか分けてみました。

〇記録・保存の事例

まず，先程の方言がなくなるという危機感，そういったものが３とも関係してきますけれども，それでとにかく消えないうちに記録・保存しなければいけないという発想がいろいろなところに出てきています。

資料の３（６ページ）は朝日新聞の記事をコピーしたものですが，金沢市教育委員会の文化財課が事業主体として，金沢の方言を記録するということを３年計画で，１年に 15 分ぐらいのビデオにまとめて３本制作しました。それが 98 年に完成しまして，実はそれで終わりかなと思っていましたら，そのときの担当係長から電話がありまして，ビデオだけではどうも使えない。見た人は「ああ，そうなの」で終わってしまいそうだと。だから，これをちゃんと生かすには解説書が必要だと思ったので解説書を書いてほしいという依頼が突然まいりました。「そんなことなら最初からこの仕事にかかわらせてくれればちゃんと解説書を書きやすいようなビデオにしたのに。勝手に作っておいて，今頃解説書を書けはないだろう」と思ったのですが，でも作った以上それも活用されなければいけないだろうということで解説書を書かせていただきました。99 年の３月に完成記念の講演会をさせていただいて，今，市内の公民館，図書館などにすべて収められております。もし，まだご覧になっていない方がいらっしゃいましたら一度ご覧になっていただければと思います。映像としてはなかなかきれいによく撮れております。私からすると注文をつけたいところはいろいろあるのですが。

新聞の記事にも書いてありますけれども，この仕事も，結局，「文化遺産」という発想です。私は少し抵抗があるのですけれども，文化財だとか文化遺産だとかいう発想ばかりで方言の記録をしていいのかという気持ちがありまして，要するにそれは方言が消えていくという前提でやっているような気がします。本当はそれではいけないのだと，消えていくから残すのではなくて受け継いでいくことをまず考えるべきだと思うわけですが，どうしても行政レベルではこういう発想がつきものでして。消えるから今のうちに残そうと。これはもちろん大事なことで，私たち研究者の立場からすると大変ありがたいことではあるのですけれども，こういうことが今全国各地で盛んに行われております。

全国各地の動きについての資料１（４ページ），資料２（５ページ）は両方朝日新聞の記事です。なぜか朝日はことばのことを取り上げるのが好きでして，今年も言葉のことでの特集を新年後，１月から始めたりしています。４ページの資料はどちらかというと研究者レベルでどういう動きがあるかというレポートです。それから５ページの資料２は行政とか民間レベルでどういった動きがあるかというレポートになっております。

ここに挙げられている事例，あとの石川県内の事例ともかかわるのですが，例えばローカルのコミュニティＦＭ局で方言を使った番組が出てきたとか，あるいは香川の讃岐弁を使ってお芝居を上演した劇団があるだとか，それから石川の押水町の例も含めまして各地でいろいろな方言集が作られているとか，それから私の知り合いで広島大学の町さんという方がいらっしゃいますが，その方が広島弁について一般の方にやや啓蒙的に書いた本が売れているという記事（私が手伝った金沢弁の『頑張りまっし金沢ことば』もそれに性格が近いものかもしれません）とか，全国各地で様々な動きが出ております。やはりその背景の一つとして非常に大きなものは，先程申し上げた，この方言の灯が消えていくという危機感なのだろうと思います。

資料３は先程の金沢市のビデオ，それから資料の４（７ページ）には私が５年間お手伝いをした小松市立博物館の方言収集事業の最初の年の紹介記事を，「博物館だより」からご紹介してあります。昨年５年間の調査が終了しまして，これからまとめに入るところですが，その結果の一部を今小松市の広報で毎月連載をさせていただいていまして，連載はちょうど４年目に入りました。まだやめろとおっしゃらないので当分続くのではないかと思っております。

資料５は，先程の朝日新聞にも載っていた押水町の例で，これも朝日新聞の記事ですが，押水町の教育委員会で地元の方の協力を得て方言集を作ったというものです。このような例は押水町，それから私の知っているところでは辰口町の老人会の方々が作られた方言集，あるいは白峰の桑島という集落でやはり老人会の方が作られた方言集があります。

それから，個人レベルでは，もし機会があったらぜひご覧いただくといいと思うのですが，最近出た石川県内の方言集では私は最も評価をしているいい本ですけれども，中島桂三さんという方の『ワカ゛ミの言葉辞典』です。「ワカ゛ミ」というのは「私」という意味でしょうが，野々市にお住まいの方で会社を退職なさってからお出しになったと伺っていますが，非常にいいものです。本当に言葉の専門家がお作りになったのかなと思うぐらい非常にいいものでして，最近出たものでは最も評価しているものです。これは全く自家版で個人でお出しになったものです。【参考文献】（３ページ）に今日お話しするようなことをあとでまた関連で見ていただけたらと思って，私が書きましたものも含めて金沢方言に，関係するものを挙げておきました。

それから，内灘にお住まいの方から，「今，方言集を作っているから」ということでご相談に乗ったりしているものもありますし，金沢市内の方でもいろいろ集めていて，「さあ，これからどう整理しようか」というのでご相談を受けたケースもあります。個人レベルでもずいぶんそういうことに関心を持ってやってくださっている方が石川県内，あるいは金沢近辺でもいるということです。そういうことがまず，記録・保存という意味合いで石川県内でもずいぶんあちこちで行われています。

それから，マスコミレベルでは３月の４日に教育テレビで「ふるさと日本のことば・石川」というのが放送されました。ずいぶんコマーシャルもやっていましたのでご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。解説は，文学部の同僚の新田さんという同じ福井出身の方言研究者が務めていました。11 年度と 12 年度，ＮＨＫが全国の 47 の放送局で各地域の方言を映像として記録するという２年計画の事業を放送 75 周年記念ということでやりました。それで私は福井局の監修をしたのですけれども，これがマスコミレベルで大々的に行われた記録事業の最近のもっともヒットだろうと思います。いずれビデオが市販されるようですし，本なども出るという予定になっていますので，また機会がありましたらご覧ください。私の研究室にも 47 都道府県全部ビデオを録ってあります。今度の日曜日は富山が放送です。それから，最後に東京が放送になりまして 47 都道府県が終わります。映像としての記録という点では非常に貴重な記録がこれで残されることになります。

〇商品化

学術的な記録保存という性格をちょっと離れまして，何か人々の郷愁を誘うというのでしょうか，ふるさと意識をかきたてるというのでしょうか，あるいは場合によっては観光の材料にするというのでしょうか，いろいろな要素があると思うのですが，方言をいわゆる商品として扱うというものも北陸の中，石川の中でも少し出ております。ただ，全国的に見ると北陸はそういうことが非常に遅れている地域で，こういうものが少ない地域だと思っています。

いくつか見ていただこうと思うのですが，「ああ，そういうものなら見た，見た」とおっしゃるかもしれません。

（以下ＯＨＰ併用）

福井で方言の名前をつけたお菓子がございます。あまり店の名前まで言ってしまうといけないのですけれども，洋風のお菓子，カステラっぽいお菓子で中にクリームとか小豆だとかいろいろなものが入っている５種類のお菓子がありまして，それぞれに福井の方言の「かたいけの」とか「ほやの」とか「おもいでな」とか「てなわん」とか「おぼこい」，「てなわん」は石川県でも使いますけれども，こういう言葉がそのお菓子のイメージに合わせてつけてあります。以前はマイナーだったのですが，最近福井へ行きましたら駅の売店でも売っていましてメジャーになったのだなと思っています。今，福井ではこれが唯一かなと思います。石川県では昔から山中温泉の「にゃあにゃあ饅頭」が方言を名前に使ったという点で有名なお菓子になりますが，石川県もやはり多くはありません。

これは福井のあるギフトショップが作りました包装紙ですけれども，今日お配りした資料（10ページ）に一部をコピーをさせていただきました。実はこれにも私からんでおります。富山で実はこれの先例があります。富山の方言をちょっと載せたような包装紙を作ったギフトショップがありまして，ギフトショップ仲間ということであるギフトショップの社長が，たまたま福井新聞に方言のことが取り上げられて私が，「福井の人は方言をどうも好きではないのだ」ということを書いたら，福井人としては寂しいというわけで，「ぜひ，うちの会社で方言を包装紙でアピールしたい」ということです。ちょうど丸岡の一筆啓上賞の包装紙を作ろうと思っていたので，それと同じデザインで方言の文を入れて作りたいからということでした。これは全部で 48 文例あり，まったく同じものは一つもありません。48 文例をちりばめて包装紙を作っています。これは，商品化というのとはちょっと違って，これで商品を包まないといけないのですけれども，そういう商売にこういうものを利用しているという一つの例だろうと思っています。

講演でお土産が出るというのは珍しいと思うのですが，年末に社長に言ってたくさんもらってきましたので，今日は 10 枚ほどこれを先着順で差し上げます。

結構評判がよくて，地元の高校の先生が方言のテキストの例に使うとかおっしゃって，わざわざ電話をして了解を得ていらっしゃるとか，あるいは，ご主人がゴルフのコンペでこれに包まれた商品をもらってきて，これを見て懐かしい福井弁が出ていて感激したといってはがきを寄こしてくださった方がいるとか，いろいろなことがありまして，作ってよかったと思っています。そういう何かふるさと心をかきたてるものがあるようです。

それから商品化関係では，ギフトショップの包装紙と同じ福井の例で，資料８（11 ページ）に新聞のコピーを載せています。これも私がからんでいますけれども，開かれた大学とか言っているものですから拒否できなくて何でもお手伝いしています。福井に河和田塗りという，石川でいうと山中塗りにちょっと近い，わりと日用的な漆器を作っている産地が鯖江市の東の方にあります。そこのある漆器卸しの社長さんから突然電話をいただきまして，今度お盆に方言を入れて作りたいのだということで，方言入りのお盆を作るのをお手伝いしました。ただ，これについては一般の方が買うのかなと心配しているのですけれども。むしろ「越前そばの店に売りこんだらどう？　これにそばが乗って来たら何となくいいんじゃない」と言っているのです。社長さんは期待して作ったみたいですけれども，売れ行きは怖いので聞いていません。

それから写真は入れておりませんけれども，先程富山で方言の包装紙を作った会社が，今度は結婚式の引き出物用に有田焼きの大皿に方言を入れたものを作りました。これは売れているのだそうです。方言というのはどちらかというと素朴なもので，ちょっと有田焼の高級感とは合わな

いのですが，そのミスマッチがよかったのでしょうか。有田焼の高級な皿に方言が入っている。結婚式の引き出物によく使われているのだそうです。富山の場合，新聞でそういう記事を見たことがあります。

○観光への利用事例

次に商品化とも若干関係あると思うのですが，商品化はどちらかというと地元の人向けの，何かそういうふるさと心をそそるというねらいを持っているとすれば，むしろ外から来た人に方言をアピールして，地方らしさ，地域らしさを出そうという発想でしょうか，観光に方言を利用するという例が全国各地で見られます。その辺も北陸地区は利用のし方がまだまだ少ないという感じがしていまして，金沢ボランティア大学校の観光コースの講義で，「観光にもっと使いましょうよ」と言っているのですが，そういう例を少し見ていただきたいと思います。

これはご覧になった方いらっしゃるでしょうか。山中温泉のキャッチフレーズで最近ずっと使われております。「ゆっくりしていきね〜ね」。これは金沢弁でしたら「ゆっくりしていきまっし」とか「いくまっし」となるのでしょうけれども，山中は「〜まっし」を使いませんので，福井的な「〜ねえね」。正確には福井の人は「ゆっくりしていきねえの」と言うのですけれども，山中ですと「いきね〜ね」と「ね」になります。これが山中温泉のキャッチフレーズで使われています。

これは今でも使われているのかどうかわかりませんが，白山麓の吉野谷村のパンフレットに「ちょっこ来んけ」というのがありまして，それから能登の柳田村に「ふるさと体験にいっぺんいらっし」という，こういった例が観光パンフレットに出ております。こういったものがだんだん増えてきているのもやはり時代なのかなと。

それから昨年の暮に日本語教育学会が富山でありまして，富山へ行ってきましたら，そこでいただいたパンフレットに早速こういうのがありました。「食べに，飲みに，こられマップ」という，富山弁の「〜られ」というやつです。「見られ」「来られ」と富山でよく使われますね。金沢の「まっし」と並んでこの「られ」というのはよく使われるわけですけれども，こういうのが市内飲食店ガイドのキャッチフレーズに使われているという例です。

その他直接観光とは関係ないものも含めましてざっといくつかおもしろい例を見ていただこうと思います。

これは金沢の有名な飴の俵屋さんの袋に出ている，「砂糖はいっとらんけど甘いがや」という。「冷やして置いとくまっし」「かまんとなめまっし」とか。こういう言葉が最近は箱にも書いてあるようです。でも，飴を買わないで箱だけ下さいとは言えないものですからまだもらっていません。

あとでまた「まっし」のときに話題にしたいと思いますが，ときどき自宅に情報誌で「おいでまっし」というのが入るのです。これは実は地元の方が非常に抵抗があるという方がいまして，「おいで」に「まっし」はつけないだろうと思われる方いませんか。これはあとでその辺の理由を，なぜ，これがつくのかということを解明しておきたいと思います。

これはＪＡの食料，食べ物，お米などの宣伝のチラシです。「食べまっしクラブ」という，これも「まっし」です。「まっし」以外ないのかというぐらい「まっし」が多いですけれども。

それからこれも五郎島金時，サツマイモのパンフレット，「食べまっし五郎島金時」です。

こちらはついでに見ていただきます。某国会議員の選挙のときのパンフレット，「どいね，金沢

ほんでいいがかいね」と，こういうところにも方言が使われているということです。

これはご覧になった方がいらっしゃるかと思うのです。どこにでもある「方言湯呑」です。

これは今ないようですけれども，同僚の新田さんが昔学生の頃に買ったといって見せてくれた「方言のれん」のミニ版みたいなものです。金沢には２～３点ありますけれども，なぜか「方言のれん」も金沢は高いのです。なぜそこまで高級感を狙うのかと。

それから店先などによく方言を使った例がありますけれども，金沢市内でもときどき見ます。「ちょこっと入ってみまさんか」という，さっきの「まっし」と関係のある言葉ですね。それからこちらは今もあるのでしょうか。「三十間長屋」のだいぶ前の写真ですけれども，「いんぎらーっと百畳」という，ゆったりと百畳ということになるわけです。

よく金沢方言の語り手として登場なさった木倉屋さん，木倉屋ゝ造さんという方がいらっしゃいますが，そこのお店の店先，看板のところに「ようこそ古都金沢へおいであそばしみした」という，ちょっと小さくて読めないかもしれませんが，そういう言葉が入っています。

それからこちらは，これは確か福井だと思うのですが，実はどのお店だったか忘れてしまったのですが。「よう来ておくんなったのう」という福井弁です。店先にちょっと入っているというやつですね。

これも福井の例ですが，「どうぞ皆さん福井に帰ってきて就職してね」というので，県外に出た学生たちに「福井へ戻っておいでよ」という就職セミナーのチラシに，「やっぱ福井やのう」と書いてあります。

それから，小松の情報誌で「おんぼらーと」というのがあります。これは今も出ているものです。探すといろいろあります。

これは大学の方はご存じだと思いますが，「きぃつけまっし」という学生の安全生活の手引き，これはどなたがおつけになったのか知らないのですが。最近は何か学生相談室で「よるまっし」という名を使って宣伝していらっしゃいますね。

それからこちらの方は金沢市のこどもセンターが出している情報誌で「見まっ誌」と。これは「まっし」のところを雑誌の「誌」にかけている，これもおもしろい例ですね。ただ，なぜ「まっし」ばりなのかとは思いますけれども。

それから，これが極めつけですね。「見まっし，乗りまっし，プレマシー」というこれは駄洒落なのですけれども，こういうのが北國新聞のコマーシャルに出たことがあります。

こういう形で観光と直接関係ないものも今ざっとお見せしましたけれども，いろいろなところで方言がいろいろな利用のされ方をしているという一つの例かなと思っております。これもそれだけ方言がいろいろなところで見直されているという一つの証拠かなと思っています。

○方言で演じる

観光はその程度にしまして，次につい最近行われたものですけれども，尾山台高校の演劇部が２月の 24 日にラブロのアートシアターいしかわで金沢弁のお芝居をやりました（資料９）。見てきてちゃんと録画と録音をとってきましたけれども，時間があればお見せしたいぐらいなかなかいいお芝居でした。これなども最近，全国あちこちで見られる方言の利用の仕方の一つだと思います。その新聞記事をあとでお読みいただくといろいろ書いてありますけれども，やはりこれも共通語で演じるのとはちょっと違う演じやすさですね。やはり高校生ぐらいですと，共通語は使えても生きた共通語にはまだなっていないというところがあるのかなと思います。何か書き言葉的な共通語なのかと。そういう点でやはり，舞台で演ずるのは日常的な金沢弁の方が自分の気持ちを素直に出せるというところがあるのかなと，聞いていて，見ていてそういう気がしました。一緒に小学生と中学生の子どもを２人連れていったのですけれども，小学校３年生の娘もよくわかって聞いていました。見ていました。あれが共通語だったらたぶんわからなかったところもあるかなと思うのですけれども，金沢弁だったからよくわかったと本人も言っておりましたので，そういうよさがあるかなと。

それから演じる人たちも普段，お芝居というのは共通語で演じると思い込んでいますから，かえってやりにくさはあったみたいですけれども，でもそれは入りかけだけで，入ってしまうとやはり自分の言葉で演ずるということのよさというものをやはり感じてくれているのではないかと思います。劇団１１０ＳＨＯＷの『ＤＡＲＡに逢いたい』というのもそれと似たような発想で行われたものであります。こういったことが全国各地で行われています。

それからもっとホットなニュースで，つい３日前ですか，３月 14 日，今週の水曜日にたまたま私に京都の知り合いからファックスが入りまして，「経済新聞の文化欄に先生の名前が出ていたよ」というのです。それで，経済新聞など見たことがないですから，「えっ，何？」というので電話をしたら，何のことはない，ちょっと知っている大原さんという方が書いていた記事の中に，「昔，私に大学で教わりました」ということで名前が出ていただけのことなのです。

たまたま，私の以前の東京時代の非常勤先で方言の授業を聴講していらした女優さんがいらっしゃいまして，その方は方言指導を専門にしている方で，お芝居で役者さんに方言を指導する。この方，非常に特殊な方で，大阪で生まれて，広島に疎開して，京都で劇団生活を送ったというので３か国語をしゃべれるのですね（笑）。いや，そういう経歴でも３か国語をしゃべれる人というのはそうはいないのですけれども，非常にやはり言葉に敏感な方で３つを非常にうまく使い分けられるのです。それで広島の，例えば原爆がテーマになった『黒い雨』という映画が以前ありましたが，あの映画の方言指導をずっとつきっきりでおやりになるとか，広島が登場するとほとんどこの方が今方言指導をしています。それから，京都が舞台になるようなドラマなども，ＮＨＫのドラマを見ていても，「方言指導－大原穣子」などと出てくることがよくございまして，今やもう方言指導の第一人者，リーダー的な方ですが，たまたま私の教え子みたいな感じになるものですから，何かというといろいろとご相談に乗っているのです。

こういう世界も実は，今非常に注目されています。つまり，以前でしたら適当に，例えば金沢が舞台になるのだから，「～がいね」と一言入れておけば，まあ金沢風だというようないいかげんな対応が多かったのですけれども，最近はそういう点では非常にしっかりと多くのドラマ，映画，演劇，そこを舞台にするからにはそこの言葉を使わせる必然性があるのだという考え方が徹底してきたという感じがします。ですから，方言指導という仕事が一つの独立した仕事になってきた

のです。以前は本当におまけだったのです。名前も字幕に出ないような時代があったのですが，最近はプロとしてちゃんと名前が出るような時代になってまいりました。

たまたま３日前の新聞に「方言指導はこういうふうにするのですよ」と大原さんが紹介している記事がありまして，こういう世界をご存じない方には面白いかなと。私はいやというほど聞いていますので珍しくも何ともないのですが，役者に方言を指導するというのはなかなか大変な仕事なのです。この方も女優さんなのでできるのです。ただ，言葉だけを教えればいいというものではなくて，やはり演技させながら方言をしゃべらせるというのは非常に難しいのです。それから，全く生の方言でやると，やはり見ている人聞いている人がわからないので場合によっては少し方言らしさを崩すとか，そういうことを「黒い雨」の撮影の裏話で聞いたことがあります。

広島弁で，例えば「～じゃない」という否定のときに「～じゃなー」と言うのですね。そうすると，それを聞いたほかの人は「～ね」みたいに聞いてしまうから，それは絶対にやめようと，誤解されるからやめようというので監督今村昌平から「だめ」が出て，「なー」はやめたとか，そういう話を聞いたことがあります。そういうのはやはり難しいなと思います。

こういうドラマとか芝居，映画，こういう世界での方言の登場のし方もずいぶん変わってきたという一つの例だと思って見ていただければと思います。

〇地域おこしの事例

先程，地域おこしという一億創生の話をしましたけれども，あの頃から非常に増えてきたのが地域の見直しとか地域おこしに方言を利用しようという発想です。これが全国ところどころで，もちろん多くはありませんけれども見られます。１番有名なのは山形県の三川町というところで，14～15 回行われていますが，全国方言大会というので町を挙げて方言の保存と活動に力を入れている町があります。

それに刺激を受けて，私がたきつけて，石川県内でも白峰村が，去年で３回目ですけれども方言に関するイベントをやりまして，それの中日新聞の記事を 14 ページにつけてあります。去年の暮に第４回目が行われる予定だったのですが，雪だるまウィークで忙しくて後回しにされまして，そろそろやる予定になっております。また，白峰に行かなければいけないかなと思っています。

そういう方言で地域おこしをやっているような県内の事例も，ご存じなかったかもしれませんけれどもあります。また，新聞などでご覧になりましたら，どうぞ一度覗いて見ていただければと思います。

〇学校教育の事例

最後に最近の動きとして，学校教育の中でも方言というものが少しずつ見直されつつあるように思います。最近方言の授業を実践してくださった七尾の先生が今こちらにも来てくださっていますけれども，そういう先生が少しずつでも増えてくださることを期待しています。

それから最近ですと教育関係の方はご存じかと思いますが，いわゆる話し言葉指導とか音声言語指導というのがだんだん学校教育の中で重くなってきまして，私に言わせれば話し言葉とか音声言語のことを論ずるのに，指導するのに，地域の教育の中で方言を抜きにしては語れないだろうと思うわけです。そういうことで，否応なくこれから学校の特に国語の先生方は，これまで共通語だけですんでいたけれども，話し言葉の中の地域の言葉というものを子どもたちとどう考え

ていくのかということが必要な時代になっていくだろうと思っています。学校教育の中でも方言というものがある意味では光があてられて，きちんとそういう方言に対する考え方が指導されていくことを期待したいと思っています。

３．今，なぜ方言なのか？

以上のような事例が石川県内，北陸でも見られるわけですが，ではこういったことというのは結局何を背景にして起っているのだろうかということを，３番に簡単に箇条書き的に挙げました。もうすでに触れたこともありますので，もう言葉で申し上げるだけにしたいと思います。

１番最初は，先程申し上げました伝統的な方言が衰退するということへの危機感です。それがそういうことをさせている。これはもう疑いのない事実だと思います。

２番目としては，地域の見直し，地方の見直しといった全国的な流れの中での動きです。これはインターネットなどをよくお開きになる方はご存じの方もいらっしゃるかもしれません。非常におもしろい全国の方言に関するホームページを集めた山本さんという方がやっていらっしゃる「ふるさとの方言」というホームページがあります（資料 12)。アドレスは１番下の方にありますので，そちらで開いていただければ，そこに新潟北陸で 51 件という数字が出ていますが，新潟が 20 以上あったように思いますので，北陸３県は大体それぞれ 10 程度のホームページが出ていたかなという印象です。今，全国でこういうコンピュータのホームページを作るということは，どちらかというと実は若い人が中心なのです。ですから，こういう若い人たちの中で地域の方言をアピールしていこうというホームページがかなり積極的に作られています。しかも，音声つきだとか，私たち研究者の立場でも，非常に重要な資料として使えそうなものも含めていっぱいできております。これなども地域の見直しの流れの中での一つの動きだろうと思います。これはぜひ，また機会がありましたらご覧になってみてください。

それからＮＨＫの「ふるさと日本のことば」のホームページも開かれています。９ページにそのホームページの冒頭をコピーしておきました。左下にホームページのアドレスがついておりますので，こちらを見ていただきますと，これまで放送された 45 都道府県の番組の内容，それから音声，そういったものが聞けたり見られたりするようになっております。福井を開いていただきますと，俵万智さんと私が出てまいります。ということで，これもどうぞ一度機会がありましたらご覧になってみてください。

そういうことで，方言衰退の危機感，地域の見直しのいい例が，そういうたくさんのホームページの作成にも現われているかなと思います。

これも学校教育がらみですけれども，最近総合的学習というのが学校教育の中で非常に重くなりかけております。その中で，今，総合的学習のキーワードと言われているのが「国際」「環境」「地域」などです。地域というキーワードの中で総合的学習が行われる場合，附属中学校でも行われて，金沢言葉を取り上げたグループがいましたけれども，地域のことを学習するということになりますと，まだまだ取り上げている学校は少ないと思いますが，私の希望的な観測も含めて，いずれはその地域の言葉，そういったことを取り上げていくことが非常に大切なことになるのではないか，そういった中で方言を上の世代から学び，少しでも受け継いでいくという学習内容があっていいのではないかなと思っております。これもある意味では，地域の見直しの一つの流れとしてこれからあっていいことではないかと思っています。

それから先程歴史的な経緯を申し上げましたけれども，共通語万能主義へのいろいろな意味での反省，共通語に表わせないこういうものが方言にはあるではないか，共通語だけではやはりだめなのだということを感じる方たちがいるということだと思います。

資料の 13 をご覧いただきたいのですが，先程の『おいでまっし』と一緒に郵便受けに入っているＭＲＯの広報誌の『ＶＩＳＩＯＮ』というのがあります。ときどきアナウンサーの方が「アナウンサーの五感・語感」というタイトルでエッセイみたいなものを書いていまして，その中の２つを持ってまいりました。

１つは，河内さんというアナウンサーが書いているもので，「『起きラレー』から『起ッきいトコト』」ということで，富山の氷見らしいのですけれども，氷見弁で子どもを朝起すときなどに最初は柔らかく，先程の「ラレ」ですね。「起きラレ」と優しく起すのです。それが起きてこないと，「起きラレカー」というふうに「カ」がつき始めて，それでもまだ起きないと「ハ」がついて「起きラレハ」。そして，それでもだめだと今度は「マ」がつくわけです，「起きラレマ」。それでもだめだと今度は「ラレ」が落ちて，もうやさしい命令が落ちてしまって「起きんカイネ」となる。それでもだめだと促音が入って，「起ッきんカイネ」となって，それで「起ッきヨ」「起ッきいトコト」となるという，非常に多彩な命令表現に近いものを彼の経験の中から紹介しています。すべての人がこんなにたくさん使うとは思いませんけれども，これを共通語などで表現しようと思うとこういうことはとてもできないわけで，こういったものがいろいろなところに現れるとすれば，それも一つの方言の価値であると思います。

それから左の寺林さんという方，若い女性アナウンサーですけれども，地元の出身で紫錦台中学校を出てからずっと地元で学校，大学を出アナウンサーになった方です。アナウンサーになって初めて，これまで標準語がいい言葉で方言は汚いと思っていたけれども，いろいろな意味で方言を見直し始めたという，共通語の使い手であるがゆえの何か方言への「気づき」みたいな，そういったものを書いていらっしゃいます。これも共通語が万能ではないという感じ方の例です。

ほかにもこれも大事かなと思うのですが，上の「共通語万能主義への反省」とも重なると思うのですが，方言の持っている素朴さ，それからやはりおもしろいのですね。方言を使っているときというのは非常に楽しいのですね。ＮＨＫの番組でもそうでしたけれども，方言を使っているときの話し手の方たちの何とも楽しそうな映像がずいぶんテレビで流れたわけですが，ああいった方言を使っているときの非常に肩の力が抜けた，そして気のおけない人たちと本音で語り合っている，ああいう楽しさとかユーモア精神といったものが方言の持つよさであり，それを使うことの安らぎ，あるいは使われることでの安らぎ意識，あるいは最近の流行りの言葉でいえば「いやし」，いやし系の言葉というのでしょうか，そういう役割を持っているのかなという気がします。

この辺のことは研究者レベルでよく言われることなのですけれども，積極的に方言を使うように，見なおすようになった裏には，共通語が使えるようになったことがあるのではないか。つまり，共通語を使えるようになったから，その精神的ゆとりとして方言も使うようになったのではないかという指摘があります。これは大事な指摘だと思います。やはり今のような時代では方言だけで生活することは現実に無理ですから，共通語がうまくしゃべれる自信がある人ほど，かえって方言をうまくしゃべれるという面があると思います。こういったことも現代的な方言をめぐる一つの事実としてとらえておくべきことかなと思います。ですから，方言を上手にしゃべってほしかったら共通語も上手にしゃべらせてあげた方がいいと，そんな気が実はしているのです。

最近，個性を好むということが言われます。大学でも「一能一芸入試」などというのをやることがありますが，ああいう個性としての方言，つまりその他大勢とは違う言葉を使いたいのだという，そういうところに方言が利用されているような例もあります。それから先程のふるさとの意識とかかわると思うのですが，自分は石川の生まれだ，自分は金沢の人間なんだということを方言を使うことで確認するという，そういう自分の帰属意識のよりどころに方言をするということがあると思います。

最後に挙げましたのが，最近非常に日本語が多様化していまして，一人の人の中でもいろいろなスタイルの日本語が使える。そういう中で，方言は方言のふさわしい場面がある，ふさわしい役割があるのだということで，共通語とうまく使い分けながら使っていく，そういう方言を使うのにふさわしい場面をきちんと方言が確保しつつあるのではないか。そういうところで方言が積極的に使われはじめているという気がします。

４．北陸地方（石川県）の人の方言に対する意識

以上のようなことを石川県内の事例を中心として挙げてきますと,「北陸も結構捨てたものではないではないか」「方言もずいぶん頑張っているじゃないか」とお思いかと思います。ただ，やはり全国的に見ると，どうも北陸というのはまだまだ方言に対する意識があまり高くない地域だと客観的に言っていいだろうと思います。その辺のことを私がかかわりました調査データで少しお示しをします。ご参考程度に見ていただければと思います。

資料の中にも北國新聞の文化欄に私が書きました記事を引かせていただきましたけれども，この北國新聞の記事の元になったのは全国 14 人の研究者仲間でやりました「方言意識調査」の結果の一部です。これは一つの代表的な例ですけれども,「あなたは自分の方言が好きですか」という質問に対して，積極的に「好きです」と答えた回答率を３世代に分けて挙げて，14 地点を比較したものです。これだとわかりにくいかと思いますので，３世代を平均した数字を資料の 19 ページに挙げておきました。方言の好感度だけでものを言ってはいけないことはよくわかっているのですが，ある意味でこれが典型的に北陸の方言の位置付けを表しているように思うものですから，いろいろなところでよく引用させていただいています。

３世代平均の数字を見ますと，実は私どもが調査をしました全国 14 都市の中では（富山，福井はそのときの調査には漏れてあとで追加した調査です），千葉，大垣に次いで 14 地点の中では下から３番目の数字です。つまり，この数字を見るかぎり金沢の人たちというのは，どうも自分たちの金沢弁というものを積極的に好きだとは思えていない。つまり 44%，４割ちょっとの人しかそういう気持ちになれないということです。かといって，嫌いかというとそうでもない，どちらでもないという答えが多いのですが，少なくとも積極的に好きだとは言えない。その点，上の方の都市は積極的に好きだと答えている人の比率が６割～７割あるわけですから，そういう点での違いというのは大事な事実だろうと思うわけです。金沢は男性だけですと 48%ぐらいになるのですが，女性が加わりますと下がります。どうも女性の方がより好んでいないようです。これは全国的にも言える傾向です。

この調査では，実は地域の好感度も一緒に尋ねているのですが，金沢という町は好きだと答える人が多いのです。ところが，方言はどうも好きではない。つまり，地域イメージはいいのだけれども，言葉に対しては，私は「隠れたコンプレックス」と呼んでいるのですが，表にはあまり

出ていないのですけれども，こういうことを聞かれるとつい出てしまうような，顕在化しない方言コンプレックスが北陸の人にはあるのではないか。その後，学生が卒論で富山県と福井県で同じような調査をしてくれた結果をパーセンテージで示しますと，富山市がまた十数％下がりまして 30％程度，福井市にいたっては２割という非常に寂しい状況になります。北陸の中では福井の人が一番コンプレックスが強い，これは以前から指摘されていたことなのですけれども，そういう結果が出ております。

このことについては，これから方言について文化財だ何だとかあまり大上段に構えたことを言う前に，もう少し普通の人のレベルで方言というものをきちんと見直して，意識改革をして，そして年配の人たちももっと方言を堂々と使って，若い人たちにちゃんと受け継いでいく。そういうことをまずしないかぎり，いくら文化財だ何だといっても，結局はそれは消えていく前提の文化財で，話し言葉として受け継いでいくことはできないと思います。その辺で私は教育に期待するところが非常に大きいのだろうと。これからそういう意識改革をしていくという意味で，北陸という地域ではやはりそういうことが，特に国語の授業の中で必要な地域なのではないかと個人的には思っています。そういう地域だということを少し意識していただいて，詳しいことは新聞記事などをあとでお読みいただければと思います。

５．金沢方言をめぐるいくつかのトピック

○「校下」論争

少し具体的な事例で，石川県の県庁所在地としての金沢の方言に最近どんな変化があるのだろうかということで，三つほどトピックを扱いたいと思います。

昨年，北國新聞が「校下」という言葉を取り上げてご覧になった方がいるかもしれません。最初に出たのがこの９月１日の資料（20 ページ）の記事です。このときは私もコメントを求められてちょっと出ています。つまり，今，金沢市を中心とした地域で学校で使われる「校下」という言葉がだんだん嫌われて「校区」という言葉に言い換えが進んでいるということです。これをどう考えるべきかという記事です。はたして「校下」は消えてしまうのだろうかという，そういう見出しで取り上げられている記事です。つい最近，北國新聞第１面で「ふるさとの心」という連載記事を掲載しておりますけれども，そこでも「校下」という言葉を再び取り上げていまして，言葉の面からどう考えるべきかということで私もまた相談を受けたのですが，こういう記事になりました。

先程の９月の記事が出たあと，実はかなり新聞社に投書とか電話があったそうで，そのあと２面を使って「校下」について，かなり大きく出た記事があります。これはコピーできませんでしたので持ってきませんでした。

ただ，ここで私が何を申し上げたいかというと，この「校下」という言葉をめぐっての去年からの話題は，私は方言というものが，廃れていく方言と生き残れる方言があるとすると，何かそれの非常にいい例になっているような気がするのです。「校下」という言葉は音声だけで聞いていれば，これは確かに方言なのです。全国的にも石川，富山，福井という北陸３県を中心にしてしか使われていない，ほかにも少しありますけれども，明らかに方言なのです。こういう学校の行政用語にも方言があるというのは珍しい例ですけれども，明治以降にできた一種の方言なのです。方言はその地元の人たちがそれがいい言葉だと思えば受け継がれていくのが自然なわけです。新

聞の投書にも「いや,『校下』という言葉を消すと金沢の人たちの共同体意識がなくなるのだ。だから消すべきではないのだ」ということをおっしゃる地元の方もいらっしゃるわけです。

ただ，この辺のところが非常に言葉をめぐって難しいところでして，つまり「校下（こうか)」という音声だけの方言でしたらそういったことを言っていることも可能かもしれませんが，実はこの「校下」は幸か不幸か（駄洒落みたいですけれども）行政用語として漢字としてちゃんと使われている，そこでは「下」という漢字が使われている。それに対して今，金沢の外から来た人たちが非常に抵抗している。つまり，東日本は大体「学区」と言うのです。それから西日本はほとんど「校区」と言うのです。そういった言葉を使っていた人たちが北陸に転勤などでやってくると金沢では「校下」,「どうして学校の下なの。私たちが」という素直な感じ方をしてしまうわけです。

ですから,「校下」という言葉が石川, 富山, 福井全部で使われているということからしますと，本来「校下」という言葉はそういうマイナスの価値観を持っていなかったわけで今でも使っている地域，むしろ田舎に行けば行くほどそういう地域がいっぱいあるわけです。けれども私らは，金沢は特殊なのだと思うわけです。つまり，よそからたくさん人が入りこむという状況の中で，「校下」の「下」という漢字にそういった人たちがある意味付け，つまりマイナス的な意味づけをするとすれば，やはり言葉というのは大勢の人に支持されないかぎり生き残れない，大勢の人に支持されて初めて言葉というのは受け継がれていくわけで，いくらいい言葉だと一部の人が言っても，７割の人が「いや」といったら，それはもう多数決で消えていくわけです。

この「校下」という言葉は地元の方からすれば，市町村単位の大きな単位でもない，かといって町会のような小さな単位でもない，いわゆる中間コミュニティとしての非常に大事な，学校を中心とした地域単位をまとめるための大切な言葉なのだとお感じになるのは無理がないと思うのですけれども，では一部の人が言うように「校下」という言葉が「校区」という言葉に代わったからといって, 本当にその意識まで変わるのですかというふうに私などは言いたくなるわけです。むしろ,「「校下」という言葉になぜそういうマイナスの意味を感じるのか。おかしいではないか」という方が無理がある。やはりよそから来た人たちが「下」という言葉に対して抵抗を感じる。学校に対する親の考え方も変わってきていますし，学校の位置付け自体も昔とは変わってきているわけですから, そういった中で金沢というよそからの人の入り込みが多い街の中では, この「校下」という言葉は命の長くない言葉になるのではないかと予測しているわけです。

「加藤，おまえは「校下」という言葉を消したいのか」とおっしゃられると，そうではないのです。そんな気持ちは毛頭ないのです。むしろ客観的にこの言葉が漢字をともなって，つまり方言というのは文字を本来持たないのですけれども，文字をともなって使われるためにどうしてもそこから出てくるマイナスイメージがある以上，これはやはりこれから長く受け継がれていく言葉とは思えない。それが証拠に，かつて使われていた岐阜ではもうほとんど消えてしまっています。

こういう金沢の動きというのは，よそからの人の入り込みがこれから増えてくると，ほかの地域でももしかすると似たような状況になるかもしれません。それからそうではない，つまり金沢のような規模の大きい街でないと，ほとんど行政区画と学校の範囲は一致していますので，実は「校下」という言葉はあまり使う必要がないのです。方言としては通用していますけれども。逆にそういう地域ではそのまま生き残れるだろうと思うのです。金沢というのはどうも「校下」と

いう中間コミュニティに非常に大きな意味付けしていたからこそ，それが逆に消えざるをえないような状況になってきた。

そういうことで，去年から北國新聞にときどき取り上げられた「校下」という言葉は，冷たいようですけれども，研究者の立場で客観的に言いますと将来的にはそういう運命をたどる言葉なのだろう。ちょっと寂しいことですけれども，行政用語にある珍しい方言の一つがいずれは消えていくのかなと思います。

しかし，１題目，２題目という石川，富山で広く使われている歌の歌詞を数える数え方，あれはたぶん残っていくだろうと思います。つまり，そこにはマイナスの意味はない，マイナスの価値がないですから，たぶん受け継がれていくだろうと思います。100 年後，200 年後はわかりませんけれども当分は大丈夫だと思います。大げさに言うと，「校下」が「下」という字を持ってしまったための悲劇だろうと思います。最近の金沢弁が消えそうな例の一つです。

〇金沢弁の代名詞～マッシの変化

もう一つだけ申し上げて，あとは資料を見ていただくことにしたいと思います。「まっし」という言葉がなぜこんなに金沢弁としてよく使われるのか，よそから来ると非常に不思議に思われるのではないかと思います。これをめぐっては，『頑張りまっし金沢ことば』の中で書きました記事（22 ページ）をお読みいただくと，なぜ「まっし」が使われるのかということが少しわかっていただけるかと思うのです。「まっし」をめぐっては二つの動きがあります。一つは「頑張りまっし金沢ことば」の連載を始めた当初から，読者の方から「何で北國新聞社はおかしな金沢弁をタイトルにするのだ」「頑張るまっし」が正しいので，「頑張りまっし」はおかしいという指摘がずいぶんあって，そのタイトルの擁護論を私が３回に分けて書いたのがこの 22 ページの記事です。

「まっし」という言葉は年配の方はおわかりかと思うのですが，資料の 17－２（23 ページ図表１）にもあるように「マサル」の命令形です。この「マサル」はいわゆる専門的に言いますと敬語助動詞と言いますけれども，共通語で言えば「レル」「ラレル」といった助動詞あたるようなものです。

本来，「マサル」という助動詞は，伝統的な金沢弁では五段活用と一段活用で接続が違っています。五段活用には，この「頑張る」の例でわかるように，「頑張るマサン」とか，これは本来「頑張るマサラン」だと思いますが，「ラ」が落ちて「頑張るマサン」になっています。こういう形で，学校文法的に言うと終止形とか連体形に当たる形に接続をするのが伝統的な金沢弁で，「ル」という発音になったときだけときどき「ン」になるものですから「頑張ンマッシ」ともなるのです。

それに対して，上一段とか下一段と学校で教えているような一段動詞は連用形接続なのです。，「頑張りまっし」とか「読みまっし」，それから何でしたか「ゆっくり走りまっし」の「走りまっし」とか，あれは皆連用形接続の例ですが，どうしてこういうことが起っているかというと，要するに活用，接続が２種類あるという複雑さを単純化したいという動きです。それから，意味的に似ている「頑張りなさい」という共通語の形が「頑張りなさい」という連用形になっていることの影響もあると思います。こういったかたちで，連用接続に一本化するという動きがあります。

それからもう一つ，先程の『おいでまっし』という情報誌と関係しますが，あれが地元の方から「おかしいじゃないか」と，そうお思いになった方はいらっしゃいますか。ある方から言われまして，私はネイティブではないものですからそのときは一瞬答えられなかったのですけれども，

わかるような気がするのです。つまり，「マサル」は敬語助動詞ですから，「おいでる」のような丁寧な言い方に，なぜまた丁寧な助動詞をつけなければいけないのだと。地元の方にはいわゆる二重敬語的でいやらしいではないかという感じなのだろうと思います。あるいは「おいでる」という丁寧な言い方に「まっし」のような命令形がつくのはおかしいと。

けれども，『おいでまっし』をタイトルに使ったＫＣＣという会社がありますが，どなたがお決めになったかわかりませんが，きっと若い人だと思うのです。つまり，今の若い人たちは「マサル」という敬語助動詞自体をもう使わないのです。すべての活用形を完備した形では。命令形の「まっし」だけが独立して使われているのです。そうすると「まっし」の意味だけを意識すると，「～なさい」とか，それから最近の傾向としてしは「～しましょう」という勧誘的な意味。本来の敬語助動詞の意味をなくしてしまい，「～しましょう」，つまり「読みまっし」というと「読みましょう」，「頑張りまっし」というと「頑張りましょう」と，優しい命令というよりも，むしろ「私も頑張るからあなたも一緒に頑張りましょう」みたいな，励まし的な意味，勧誘的な意味に変わってきているのではないか。そうすると，もう，「おいで」に「まっし」をつけても「まっし」の尊敬語の意味が感じられなくなって，そういうことからするとこういう言い方が出てくるのも不思議ではないという気がしているのです。

今，「まっし」というのが，本来持っていた敬語助動詞の活用を完備した状態から，独立した一つの形態としてだけ使われている。そして，金沢らしさを感じさせる形態として使われているという状況があるわけです。そういう点では，優しい命令を表わす便利な形が共通語にはないのです。「頑張りなさい」というと何かきつい感じがしますし，だから共通語の命令形を補う形として「まっし」が使われる。富山の「来られ」「見られ」の「ラレ」もまったく同じだと思うのです。つまり，共通語では「れる・られる」の命令形は使わないです。それを方言としてちゃんと埋めているわけです。便利なのです。優しい感じの命令になるのです。そういう形で今，「まっし」は「マサル」の命令形として「まっし」から一つの独立した形態としての「まっし」に変化をしていると言えるのかと思います。

○衰退する方言と受け継がれ変化をする方言

最近の若い人たちの金沢弁がどんなふうに変わってきているかということで，『イソップ物語』の一節を年配の方と若い大学生に方言に直してもらって，ここがこういうふうに変わっていますよと比較して見ていただけるような例を 24 ページに挙げておきました。

25 ページには，『ＤＡ．ＹＯ．ＮＥ』というラップの曲が数年前に流行りましたけれども，それを金沢の中学生たちが金沢弁で歌うとしたらどうなるかというので金沢弁バージョンの『ＳＯ．ＹＡ．ＮＥ』『ＨＯ．ＹＡ．ＮＥ』を作ってくれたときの歌詞です。これなど見ても，年配の人だったらこうなるのが若い人はこうなっている。ある

いは年配の人が見たら今もこういう部分は受け継がれているというところを見ていただけるかなと思います。こういったもので方言テキストみたいなものを作ってみるのも面白いかなと思います。

〇気づかない方言

それから若い人に受け継がれていく方言ということでは，26 ページに，今，教養の授業で方言に関する講義を担当しているのですけれども，そこで金沢市出身の学生たちに「大学に入ってはじめてこれが方言なのだと気づいたものを挙げてみなさい」と言って出てきたものをリストアップしています。これはかなり個人差があると思うのですけれども，ここに挙がっているようなものはきっと若い人たちも方言だと気づかないぐらいによく使っている，あるいはよく聞いている方言だろうと思います。そういう意味では，ここに挙がっている言葉というのは，これからも若い人たちにそれなりに受け継がれていく方言の候補なのだろうと思っております。

６．受け継がれる現代日本語としての方言

今まで方言が地域の人たちにも非常に偏見を持って見られていたという事実は否定できないだろうと思います。ここにいらっしゃる皆さんの中にも方言にあまりいい感情を持っていらっしゃらないという方もいたかと思います。もちろんそういう方もいていいと思うのです。

ただ，全体的にはやはり方言というものは決して特殊なものではなくて日本語の一部なのだ，方言と共通語が一緒になって一つの現代日本語を作っているのだという事実をこれからは認めていくべきだと，そういう時代なのだと思っております。

最後に 27 ページに，詩人の川崎洋さんがある本をお出しになったときに，朝日新聞にお書きになった記事を載せておきました。私としては非常に共感できる部分が最後の下から２段目の「美しい正しい日本語を」という＜＞つきのあたりからの言葉に含まれているような気がしますので，ここを確認して終わりにさせていただこうと思います。

国語教育でもそうなのですが，「美しい日本語」「正しい日本語」という言葉がよくスローガンとして掲げられることがあります。これには私は非常に抵抗があります。つまり，何が美しくて何が汚いのかということを言葉においては言えるのだろうかということを常々，特に方言を研究していますと思います。方言というものを何か汚いとか，正しくないとこれまで決めつけてきた。ある意味ではそれは共通語を擁護するための便法だったのではないかという気がするわけです。つまり共通語を，書き言葉を中心とした共通語を学校で教育するための，彼はいわゆる“錦の御旗”という言葉をそこに使っていますけれども，その“錦の御旗”として利用されたのではないかと思うのです。

ですから，最後の方で「「正しい日本語」とは何か？」とクエスチョンマークがありまして，「日本語は一本の川の流れであり，本流・傍流の区別はない」はずだと。「方言と共通語は混じり合い，消える言葉もあれば新しく生まれる言葉もある。近ごろその流れのなかで（これまで指摘しているように）方言が元気だ。方言も共通語も両方豊かであってこそ川は豊かになる」というように，いかにも詩人的な表現をしていますけれども，私も全く同感なのです。そういう方言に対しての正当な評価をしていくことが，より豊かな日本語をこれからの社会で，次の世代の若い人たちに受け継いでいくための考え方の基礎になるのではないかと考えています。

かつて金沢市の商工観光課が,「美しい金沢言葉普及事業」というのをやったことがありますが,私がもし当時そこにいたならば，絶対その「美しい」という言葉を削らせたと思います。「なぜ,美しい金沢言葉だけを残そうとするのか」ということを私は言ったと思うのです。商工観光課だからしょうがないのかなという気もするのですが, やはりそういうことをしてはいけないのです。

大変長くなりました。これで一応終わらせていただきます。何か質問とかご意見などありましたらご遠慮なく，お答えできる範囲でお答えをしたいと思います。

質疑応答

（質問）　いくつか質問を書いてきたのですが，一つだけよろしくお願いします。今ますます高齢化社会が加速しております。「いやし」という観点からも医療の分野における方言療法，そういうものがあるのかどうか。

（加藤）　具体的な治療法としてはないと思うのですけれども，私の存じ上げている事例で言いますと向陽高校のある国語の先生がボランティアである病院にいらして，方言でお話を，金沢弁でなさったり，金沢方言を折り込んだ歌を歌われたりとか，そういうことをボランティア活動の中でおやりになったときに, お年寄りの患者さんたちがほんとうに涙を流して喜んでくださって,行った甲斐があってよかったということを感想として私に話して下さいました。ですからにそういうことが積極的どの程度行われているかはわかりませんけれども，確かに方言の「いやし」という部分を重要なものとして考えれば治療というか，お年寄たちの気持ちの安らぎのために，方言を利用することは有効だろうと思います。

こういう話があります。かつて東北大学の助教授をしていた，方言研究者としても有名な方が岩手にいらっしゃるのですが，その方が東北大の病院にいらしたときにたまたまあるおばあちゃんが，とんでもない高い血圧の数値を示して自分のところへ回ってきたのだそうです。「先生，診てください」と言うのでその患者さんとしゃべっていたら自分と同郷だということがわかったのです。それで,「あなたも気仙の生まれか」というわけで，そこから要するに大学の助教授という看板を脱ぎ捨てて気仙弁というか, 方言でそのおばあちゃんとしゃべり始めたそうです。そして,「おばあちゃん，ずいぶん血圧が高いみたいけれどももう１回測ってみるか」というわけで血圧を測ってみたらぐっと下がっていたと。つまり，そのおばあちゃんはきっと田舎から出てきて大学病院というので恐ろしかったわけです。大学病院に来てきっと緊張していたのです。それで血圧を測られて 200 を簡単に超えてしまった。ところが，同郷の先生がいて方言でしゃべってくれて，もうすっかり安心して，心臓の鼓動も落ち着いて，それで血圧を測ったら 120 になったという話を伺ったことがあります。方言にはそういった働きももちろんあるのだと思います。

金沢大学サテライト・プラザ ミニ講演資料　　2001年3月17日（土）

於：石川県立社会教育センター

方言の現在（いま）—石川県内の事例を中心に—

加藤　和夫（教育学部助教授）

kkatoh@ed.kanazawa-u.ac.jp

1．見直される方言

明治20年代以降、標準語制定の気運の高まりとともに、わが国では，方言は標準語に対して悪いことば・汚いことばとされ、学校教育を中心として撲滅や矯正の対象とされてきた。戦後、方言は少しずつその地位を回復してきたとはいえ、いまだに方言を劣ったことば・汚いことばと考えている人は少なくない。

一方、特に昭和30年代半ば以後のテレビに代表されるマスメディアの発達は、話しことばとしての共通語の普及に拍車をかけ、各地の伝統的方言は急速に衰退に向かうことになった。北陸地方、石川県の方言も例外ではなかった。ところが、方言衰退の危機感も手伝ってか、近年は全国的に方言見直しの動きが盛んである。⇒資料1　資料2

共通語が公的な場面・広い範囲でのコミュニケーションに欠かせないものであるのと同様に、方言もまた地域社会でのコミュニケーションにとって欠くことのできない大切なものである。方言のもつ魅力や機能・価値が、ようやく正当に評価されるようになってきた。

—戦後の方言をめぐる動き—
- 1960年以前……方言撲滅期　標準語(共通語)万能主義，戦前の価値観の継続
- 1970～1980年代……方言の再発見期　標準語万能主義への反省、地方の時代
- 1990年代以降……方言と共通語の共生期

2．最近の方言をめぐる様々な事例から—石川県内を中心に—

○記録・保存…方言ビデオ（金沢市教育委員会）⇒資料3、方言の記録収集（小松市立博物館）⇒資料4、方言集の編纂（押水町、辰口町、白峰村桑島ほか、個人）⇒資料5、NHK「ふるさと日本のことば」記録事業⇒資料6

○商品化…方言菓子（福井）、方言包装紙（福井市ギフトショップ、富山市ギフトショップ）⇒資料7、方言入り盆（鯖江市河和田）⇒資料8、方言入り有田焼大皿（富山市）

○観光への利用…「～まっし」（金沢）、「～いきねえね」（山中温泉）、「来んけ」（吉野谷村）、「いらっし」（柳田村）、「～られ」（富山）など、その他看板等→OHP

○方言で演じる…尾山台高校演劇部⇒資料9、劇団110SHOW（1995年「ダラに会いたい」）、ドラマ・映画・演劇の方言（方言指導）⇒資料10

○地域おこし…方言に親しむ集い（白峰村）⇒資料11、全国方言大会（山形県三川町）

○学校教育（国語教育）…方言の単元指導（小４、中２）、話し言葉指導、音声言語指導の重視

３．今、なぜ方言なのか？

○伝統的方言の衰退への危機感

○地域・地方の見直しの機運…方言ホームページの増加⇒資料 12、学校における総合的学習一地域学習

○共通語万能主義への反省…共通語では表せない、表しにくい感情や意味⇒資料 13
共通語だけが日本語ではない（共通語＋方言＝日本語）

○方言のもつ素朴さ、ユーモアへの気づき…やすらぎ、いやし、娯楽としての方言

○共通語能力の向上によるゆとり

○個性としての方言

○言語的アイデンティティーの確認…地域への帰属意識

○価値観の多様化によるスタイルとしての方言への注目…使い分け、ストラテジー（公的⇔私的、外⇔内、疎⇔親、待遇的価値など）

４．北陸地方（石川県）の人の方言に対する意識

○北陸の人は方言に対する意識は全国的に見て高くない…隠れた（顕在化しない）方言コンプレックス⇒資料 14 資料 15-1 資料 15-2

５．金沢方言をめぐるいくつかのトピック

○「校下」論争…方言としてのコーカと行政用語としての「校下」
⇒資料 16-1 資料 16-2

○金沢弁の代名詞～マッシの変化…文法的変化（連用形接続への一本化）と意味の変化（尊敬の助動詞の命令形＝優しい命令から勧誘的意味に⇒資料 17-1 資料 17-2

○衰退する方言と受け継がれ変化する方言…金沢弁訳イソップ物語の世代差⇒資料 18、DA.YO.NE 金沢弁バージョン⇒資料 19

○気づかない方言…方言だと意識されないため使い続けられる方言⇒資料 20

【参考文献】一金沢方言関連を中心に一

長岡博男（1969）「金沢のことば」，『金沢市史　現代篇』下巻，金沢市

川本栄一郎（1983）「石川県の方言」，『講座方言学６ 中部地方の方言』，国書刊行会

志受俊孝（1983）『金沢の方言一金沢弁のいろいろ一』，北国出版社

島田昌彦監修（1987）『「おいであそばせ／おいだすばせ」（美しい金沢言葉普及事業「接客ことば」改訂版），金沢市商工観光課

島田昌彦（1989）「金沢のことば」，『金沢市史（現代編）続編』，金沢市
川本栄一郎（1992）「石川県方言」，『現代日本語方言大辞典 第１巻』，明治書院
北國新聞社編集局編〈加藤和夫編集協力〉（1995）『頑張りまっし金沢ことば』，北國新聞社
加藤和夫（1995）「隠れた方言コンプレックス」，『変容する日本の方言』，大修館書店
中島桂三（1996）『ワカ゛ミのことば辞典』（自家版）
島田昌彦（1998）『加賀城下町の言葉』，能登印刷出版部
加藤和夫（1998）「方言と共通語の共生をめざして」，「北國新聞」1998 年４月５日付・北國文化欄
加藤和夫（1999）『ビデオ「金沢ことば」の解説』，（ビデオ金沢ことば・全３巻付属解説書），金沢市教育委員会
加藤和夫（1999）「日本の方言探訪⑤ 石川編」，『月刊 言語』1999 年５月号，大修館書店
加藤和夫・新田哲夫（1999）「方言の風景一金沢に育まれた方言の伝統と新生一」，『平成11 年度金沢大学放送講座テレビ「知の集積回路：プロジェクト金沢」テキスト』，金沢大学大学教育開放センター
佐藤和之・米田正人編著（1999）『どうなる日本のことば一方言と共通語のゆくえ』，大修館書店（佐藤和之・米田正人・加藤和夫ほか８名執筆）
加藤和夫（2000）「金沢方言に見る『方言進化論』一方言は本当に衰退しているのか一」，『北國文華』第５号，北國新聞社

MEMO

資料 15-2

◎「地域」の好感度

1位	札幌	(93%)
2位	仙台	(92%)
3位	那覇	(91%)
4位	京都	(89%)
4位	福岡	(89%)
6位	金沢	(86%)
7位	広島	(82%)
8位	弘前	(79%)
8位	鹿児島	(79%)
10位	千葉	(77%)
11位	東京	(72%)
12位	高知	(72%)
13位	大垣	(66%)
14位	富山	(65%)
15位	松本	(55%)
16位	福井	(52%)

◎「方言」の好感度

1位	松本	(85%)
2位	那覇	(83%)
3位	弘前	(75%)
3位	福岡	(75%)
5位	札幌	(66%)
6位	高知	(64%)
7位	鹿児島	(61%)
8位	広島	(60%)
9位	京都	(57%)
10位	仙台	(53%)
10位	東京	(53%)
12位	金沢	(44%)
13位	千葉	(37%)
14位	富山	(30%)
15位	大垣	(29%)
16位	福井	(20%)

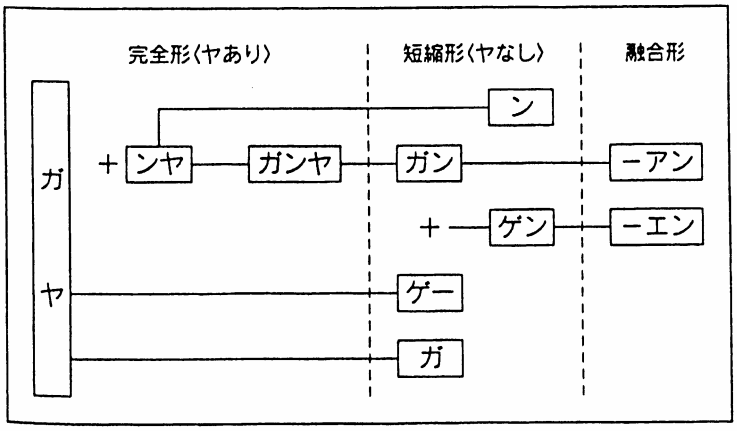
資料 17-2

図表1　金沢方言の敬語助動詞マサルの動詞への接続と活用

	〈五段活用〉	〈一段活用〉
未然：	頑張(がんば)るマサン	見(み)マサン
連用：	頑張るマサッタ・マシタ	見マサッタ・マシタ
終止：	頑張るマサル	見マサル
連体：	頑張るマサル時	見マサル時
仮定：	頑張るマサレャ	見マサレャ
命令：	頑張るマッシ ↓ 頑張りマッシ	見マッシ

平成11年度金沢大学放送講座／知の集積回路：プロジェクト「金沢」テキストより

図表2　金沢方言の「のだ」形に関する各形式の成立の流れ



平成11年度金沢大学放送講座／知の集積回路：プロジェクト「金沢」テキストより

資料 18

イソップ物語の方言訳にみる金沢方言の世代差

原文（共通語）

①２匹の蛙の子が池のほとりで遊んでいました。
②そこへ牛が水を飲みにやってきて，間違って１匹の蛙の子を踏みつけて殺してしまいました。
③子蛙が１匹見当らないことに気がついたお母さん蛙は，兄さんはどこにいるのかと尋ねました。
④「お兄ちゃんは死んでしまったよお母さん。４本足のものすごく大きなやつがやって来て泥の中に踏みつぶされてしまったの。」
⑤「ものすごく大きなやつですって。このくらい大きかったかい。」と言うと，お母さん蛙は精一杯大きく見えるように，ぷうっと体をふくらませました。
⑥「うん！そう，もっと大きかった。」（以下省略）

〔71 歳・男性〕

①ニヒキノ　ギャワズノコガ゛　イケノソバデ　アソンドッタガ゛ヤト。
②ホコエ　ウシガ゛　ミズオ　ノンニキテ　マチコ゛ーテ　イッピキノ　ギャワズノコオ　フンツケテ　コロイテモタ。
③チンケー　ギャワズガ゛　イッピキ　ミエンコトニ　キーツイタ　カーカギャワズワ　アンカ　ドコ　イッタガ゛ヤト　キータガ゛ヤト。
④「アンカ　ゴネテシモタガ゛ヤ　カーチャン。ヨンポンアシノ　ガンコニ　デカイヤツガ゛　キテー　ドロンナカニ　フミツブイテシモタ。」
⑤「ガンコニ　デカイヤツッテ　コンクライ　デカカッタンカ。」トユート　カーカギャワズワ　セーイッパイ　デカイガ゛ニ　ミエランニ　プーット　カラダフクラマイタ。
⑥「ウン。ホヤケド　マダマダ　デカカッタ。」

〔19 歳・女性〕

①ニヒキノ　カエルノコガ゛　イケノソバデ　アソンドッテンテ。
②ソコニ　ウアシガ゛　ミズ　ノミニキテー　マチガ゛エテ　イッピキノ　カエルノコオ　フンズケテ　コロシテシマッテン。
③コガ゛エルガ゛　イッピキ　ミアタランコトニ　キーツイタ　オカーサンガ゛エルワ　ニーチャンワ　ドコニ　オルンカ　キーテン。
④「ニーチャン　シンデシモータワ　カーチャン。ヨンホンアシノ　モノスケ゛ーデッケーヤツガ゛　キテ　ドロンナカニ　フンズケラレテシマッタワ。」
⑤「モノスケ゛ー　デッケーヤツヤッテー。コンクライ　デカカッタンカ。」トイッテ　オカーサンガ゛エルワ　セーイッパイ　デカク　ミエルガ゛ニ　プーット　カラダオ　フクラマシテン。
⑥「ウン。ソーヤケド　モット　デカカッタワ。」

資料20

金沢市出身の金大生の「気づかない方言」

※以下の資料は加藤が金沢大学で1年生を対象に開講している教養的科目「地域語の諸相」の受講生（1997・1998年度）へのアンケートによって得られたものである。

～ウェー（～よ<自慢気に言う場合の言い方>）　例：いいウェー。
～ガイネ（～よね）、～ガイヤ（～よね）　例：出て来んガイネ（出て来ないよ）。
～ケ（～か）　例：今日○月○日ケ（今日は○月○日か）。～シンケー（～しないか）
～ゲン（～よ）　＊前節形式が「～た」の場合～テン，「～な」の場合～ネンとなる。
～ジ、～ジー（～だね）　例：いいジー！　すごいジー！　○○ちゃん、今日は元気やジー。
～ダイメ（歌の歌詞の「～番」にあたる言い方）
～トイテ（～しておいて）　例：怒らんトイテ（怒らないでおいて）。
～トッテ（～していて）　例：静かにしトッテ（静かにしていて）。
～ネンケド（～なんだけど）
～マッシ（～なさい）　例：あんた先行きマッシ。
～ヤシ（～から）　例：もうすぐ先生来るシ、お菓子でも食べとれば時間たつシ、待っとって。
～ント（～ないと）　例：帰らント（帰らないと）。
イジッカシー（鬱陶しい。見ていてイライラする感じ）　＊ジクラシーからの変化　例：あー、もうイジッカシー。何しとんげんて。　イジッカシー蝿やな（うるさい蝿だな）。
オイデマス（いらっしゃいます）　例：○○先生はただ今オイデマセン
オイデル（いらっしゃる）　例：○○先生がオイデル
オモシー（面白い）
カゼネツ（口内炎）
カタイ（賢い。利口な。行儀がよい）　例：あらあカタイ子やねえ（まあ，賢い子だねえ）。
カタガル（傾く）　例：車が車庫にカタガッテ入った。　眼鏡カタガッとるよ。
ケンケン（鉛筆の先が尖った状態）　例：鉛筆ケンケンに削って。
コソバイ、コソガシー（くすぐったい）
ゴボル（雪などに足がもぐる）
シンドイ（つらい）　＊もともと近畿方言形だったものが広まったもの。
ダラ（馬鹿）　＊ダラブチとも。　例：この、ダラブチ！　ダラじゃないけ（馬鹿じゃない）。
ドブス（道路横の溝。側溝）
ニオウ（臭いを嗅ぐ）　例：ニオワないで下さい（臭いを嗅がないで下さい）。
ハガヤシー，ハゲシー（むかつく。いらいらする）
ハシカイ（ずる賢い）　例：あらー、この子ハシカイ子やー。
ヒドイ（疲れた。つらい）　例：風邪ひいてヒドイ。今日休む。
ピンピン（鉛筆の先が尖った状態）　例：鉛筆ピンピンに削って。
メッタジル（豚汁に似た汁）
モノイ（だるい。体の調子が良くない）　例：昨日から何かモノイげんけど風邪かねえ。
モタモタ（ちらかっている状態）　例：私の部屋モタモタやし入らんといて。
ヨシカカル（寄りかかる）　例：椅子にヨシカカル。